

タゴールさんのインド楽器



インド古典音楽の発展には、王侯貴族や地主階級がパトロンとして大きな役割を果たした。宮廷や大邸宅の「音楽ルーム」に演奏家を招き、サロニックなコンサートを開くことは、パトロンたちの楽しみであり、自分たちの威光を外内に知らしめる手段でもあった。音楽家たちは、パトロンの庇護のもと、現在古典音楽と呼ばれる音楽の基礎を作り上げたといえる。

このような音楽のパトロンとして有名な一族に、インド東部ベンガル地域のタゴール家がある。ア

ジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したラビンドラナト・タゴールやインド音楽を世界に広めたS・M・タゴールもこの一族の出身である。彼らは音楽だけでなく美術、文学、法律など多分野で有名人を輩出してきたインドきっての名家である。

このタゴール家の出身で一九五〇年代に来日し、以来大学で教鞭をとりながら日本にインド

音楽を広めた人がいる。サンディップ・K・タゴールさんだ。南アジアを代表する弦楽器シタールや、ラビンドラナトの作った詩に音楽をつけたラビンドラ・サンギートの指導者として、長年にわたりインド音楽を伝えてきた。また、サンディップさんは絵画や彫刻でも個展を開くほどの才能の持ち主であるだけでなく、文筆家、翻訳家としても活躍し、川端康成の『雪国』や『千羽鶴』をベンガル語に翻訳したことで知られている。長年の日印文化交流に果たした功績に対して、二〇一七年にはインド政府から名誉あるラヴァシ・バラティヤ・サンマン賞を受賞した。

二〇一六年、民博はサンディップさんが所蔵していた楽器八点を譲り受けることになった。この中には祖父プロフッロナトが愛用していたシタールが含まれる。十九世紀後半に制作されたと推定されるこの楽器は、現在演奏されているシタールとは形や構造が大きく異なっている。現行楽器がもつ独特の響きに貢献している共鳴弦（タラフダール）がなく、原型となったと考えられる中央アジアや西アジアの弦楽器に類似する。また共鳴胴が平で、その形からカチュア（亀）型と呼ばれている。この古い形のシタールは、サンディップさんが楽器を引き継いだ一九三〇年代末でもほとんど作られておらず、シタールの歴史を知る上で重要な資料である。

サンディップさんの楽器には、この古シタールのほかに、自らの音楽活動で用いてきたスルバハール（大型シタール）、ディルルバーやエスラージ（共に擦弦楽器）、声楽家が歌の伴奏に奏でるスワルマンダルなどが含まれる。これらの楽器は、サンディップさんが実際に長年演奏してきた楽器であり、日本におけるインド音楽の受容史の証人でもある点で重要である。

サンディップさんから譲り受けた楽器のうち、古シタールを含む数点を、二〇一九年二月二十一日から開催する企画展『旅する楽器―南アジア、弦の響き』で展示することになった。サンディップさんとともにインドから日本へやってきた旅人たちの姿を、是非展示場でご覧いただきたい。

（寺田 吉孝）